

において、てんかんと診断される数は少ないが、精神科においては精神症状を呈するてんかんでなく、偽発作との鑑別やその対処を行うためにもてんかんに対する理解は必要であり、患者を対象とした医療を行う上で、てんかん発作だけでなく偽発作やその心理社会的背景への理解も重要と考えられた。

5 てんかん患者の QOL — 精神症状の有無による比較 —

遠藤 太郎・福井 弘恵・天金 秀樹
金子 尚史・鈴木雄太郎・前田 雅也
藤田 基・和知 学

新潟県立精神医療センター精神科

【目的】精神障害を併発するてんかん患者の割合は約 20%におよぶと言われており、臨床的に重要な問題となる。これらの精神症状は、てんかん患者の生活の質 (QOL) にも影響を及ぼしている可能性がある。今回我々は、精神症状がてんかん患者の QOL に及ぼす影響について、アンケート及び QOL 評価尺度を用いて調査を行った。

【方法および対象】精神医療センター外来通院中のてんかん患者 91 名を対象に、精神科医師によるアンケート聴取及び QOL 評価を行った。QOL 評価に関しては、Heinrichs らの QOL 評価尺度に、自己安全性、環境の安全性、同意能力、生活環境の快適さの 4 項目を追加したものをを用いた。本研究の対象者からは、書面により同意を得た。

【結果】対象者は男性 55%、女性 45%、平均年齢は 41.6 歳、精神障害を認めるものが 31.9%、精神遅滞を認めるものが 41.8% だった。就業率は 46.2%、自動車免許所有率は 26.4% だった。てんかん診断の内訳は、全体の約 3 分の 2 が部分てんかんで、その約半数が側頭葉てんかんだった。精神症状は、幻覚妄想状態が 42% と最も多かった。QOL 評価尺度の点数は、精神症状・精神遅滞のいずれも認めないもの、精神症状のみ認めるもの、精神遅滞のみを認めるもの、両方を認めるものの順で高かった。項目別に検討すると、精神症状は、

家族とのつながり、仕事の能力活用不足、満足度、一般的所持品、活動、自己および環境の安全性、同意能力には影響を与えていなかった。薬剤に関して、フェニトイン内服群は非内服群に比し QOL 点数が有意に高く、バルプロ酸内服群は非内服群に比し QOL 点数が有意に低く、フェノバル内服群は非内服群に比し精神症状の併発率が有意に低かった。今回の調査では 75% の症例で多剤併用が行われ、3 剤以上併用している群では QOL が低下する傾向を認めた。今回の結果では、側頭葉てんかんと精神症状の間に有意な関係は認められなかった。

【考察】他の研究の結果と比較すると、精神症状、精神遅滞を認めないてんかん患者の QOL は正常対照群とほぼ同じ QOL 点数だった。精神症状、精神遅滞を持つてんかん患者は、統合失調症患者より低い点数を示していた。また、精神遅滞は QOL の全般に影響を及ぼすのに対し、精神症状は、家族などの狭い範囲の限定された対人関係や、身の回りの個人的な活動等にはあまり影響を与えないと言える。危険を判断する能力や同意能力などの認知機能は保たれていたという点は、てんかんに伴う精神症状は、統合失調症で認められるような陰性症状、認知機能低下が少ないといった報告と一致するものと考えられる。今回の調査では 75% の症例で多剤併用が行われ、3 剤以上併用している群では QOL が低下する傾向を認めた。このことから、多剤併用は相互作用により副作用を増強する恐れがあり、QOL にも影響を与えている可能性がある。

6 てんかん手術後の精神症状

小林 真理・笹川 陸男・亀山 茂樹
国立療養所西新潟中央病院
てんかんセンター

2000 年から 2002 年の 3 年間に当院脳神経外科で施行されたてんかん手術症例 60 例 (男性 32 例、女性 28 例、手術時平均年齢 28.1 歳、発病平均年齢 13.3 歳) のカルテ記載を後方視的に検索し、不安状態、抑うつ状態などの精神症状をもつ 3 症